2014 年度　COC 事業における地域貢献事業

１．　市民公開講座　～共に学ぶコミュニティケア～

H27 年 2 月 28 日（土）に、神戸市須磨区役所 4 階多目的会議室において、神戸市看護大学　地（知）の拠点整備（COC）事業　第 1 回市民公開講座を開催した。今年度は「共に学ぶコミュニティケア」をテーマとし、超高齢社会において地域包括ケアシステムが目指す、「地域住民が安心して暮らし続ける街」について、市民とともに共に学び、考える機会とした。地域住民や民生児童委員、ボランティア、保健･医療･福祉・介護の専門職など 186 名が参加し、認知症をはじめとする多様な地域課題に対し、一人ひとりがどのように考え、取り組んでいくのかを考える機会になった。以下、プログラム内容に沿って、概要を紹介する。なお、本会は、神戸市須磨区役所、神戸市須磨区社会福祉協議会との共催で実施した。

【開会の挨拶】松葉祥一（神戸市看護大学教授、図書館長）

神戸市看護大学は、開学以来「地域と共に学び、共に歩む」ことを目指してきた。昨年度は文部科学省の「地（知）の拠点整備（COC）事業」に採択され、「共に学び、共に創る、コミュニティの拠点づくり」を目指して取り組んでいる。日本では 2025 年に高齢者数がピークを迎えるが、神戸市の高齢化率は政令指定都市中 5 位と高く、特に須磨区のニュータウン地区では高齢化率が 40%に達する地区もある。本学は、COC 事業を通し、神戸市が高齢化対策として掲げている、「訪問看護の人材育成」「医療連携の強化」「地域ケアシステムの構築」「地域住民のネットワーク構築」の課題解決に取り組んでいる。具体的には、地域住民が実習･演習･講義に参加する地域連携教育（コラボ教育）を中心に「地域住民の暮らしを理解できる人材の育成」「地域連携、地域における看護を担う人材の育成」に進めていく。また、研究や地域貢献事業を通してもさまざまな取り組みを行っている。本日の市民公開講座では、市民の皆さんとこれからのコミュニティについて共に考え、学ぶ機会としたい。

【開会の挨拶】谷　真行（神戸市須磨区保健福祉部長、社会福祉協議会事務局長）

須磨区は平安の時代から続く歴史と文化や自然環境のある街である。区民アンケートにみられるように、市民からは「住みやすい街」「住み続けたい街」として評価をいただいている。しかし、有識者による日本創生会議で「人口減少による消滅可能性のある市区町村」として、神戸市では唯一須磨区が挙がり、統計的にも須磨区は兵庫区長田区など他区に比べて高齢化のスピードが早い。しかし、そのような中でも地域住民がいきいきと生活することができる。北須磨地区では自治会等が中心となり、地域情勢に合わせ、保育所や高齢者施設など必要な施設の整備に取り組んできた。また、挨拶運動をモットーに街で会う方々に声をかけている。挨拶は重要で、声をかけあうことが防犯につながり、街の治安がよくなる。このように、近隣が気にかけあい、各種団体がさまざまな取り組みをしている。今日の市民公開講座が実りある 1 日になることを願っている。

【第１部】いきいきと安心して暮らせる地域づくりに向けて

座長　片倉直子（神戸市看護大学　教授）

〇研究報告―認知症高齢者がいきいきと安心して暮らせる地域づくりにむけて

石井久仁子（神戸市看護大学　助教）

認知症の周辺症状の１つである徘徊は、行方不明や事故等で死亡する危険性もあり地域の見守りが重要である。須磨区では H25 年に「須磨区捜してネット」を立ち上げたが、認知症高齢者の地域生活を支えるには、SOS ネットワークの構築だけでなく、地域住民と専門職が共通の認識や理解を図ることが求められる。本研究では、認知症の方を地域で支えることの課題と取り組みについて検証することを目的にワークショップを開催した。その結果、「認知症の方もいきいきと安心して暮らせる地域づくりを阻む課題」として、「当事者意識がない」認知症の方が安心できる居場所がない」「地域のつながりがない」の 3 つが重点課題として抽出された。専門職･地域住民共に認知症に関する知識や地域情報不足が共通問題としてあがったことから、住民間ネットワークの希薄化と世代間交流の少なさに関する課題解決が重要であると考えられた。次年度は認知症高齢者の見守り事業に関する課題について、アンケート調査を実施し、地域の見守り体制の整備構築に向け検討する。

〇活動報告―須磨区における地域福祉の担い手発掘とネットワークづくり

桝一美紀（須磨区社会福祉協議会 地域福祉ネットワーカー）

地域ネットワーカーは、神戸市において H23 年度から配置され、須磨区では今年度から配置された。「制度の狭間」という言葉があるが、地域生活の中では制度では対応しきれない生活課題がたくさんある。地域ネットワーカーは、そのように既存の取り組みでは解決できない生活課題について取り組んでいる。社会福祉協議会は、社会福祉法に基づき、地域福祉の推進を行う機関で、神戸市では９区とも区役所内に設置されている。地域福祉の現状は少子高齢化の中で課題が多くなってきている。特に地域支援の担い手不足についてもよく言われており、神戸市では今年度から「担い手支援モデル事業」を実施している。担い手づくりとして、白川地区で 30 年の取組みを行ってきた白扇会ふれあい給食会や、「板宿・東部・だいち中部地区」の 3 地区合同研修会の取組みをモデルに考えると、「振り返り (HOP)」「話し合い (STEP)」「夢を見る (JUMP)」が大切だと考えている。この「担い手支援モデル事業」実施を通じて、一緒に考え、学ぶ、「場づくり」、地域住民も専門職も「共につながる」こと、相互に発信し、「伝え合う」ことを推進しながら、地域に合わせた「担い手支援・発見・養成」が私たちの課題だと考えている。

●特別講演―地域において認知症の方とどう向き合うか？

沖田裕子氏（NPO 法人　認知症の人とみんなのサポート　代表）

「地域において認知症とどう向き合うか」、これは、「認知症の人を向こう側に置いて考える」のか、「自分も認知症になるかもしれない」と考えるかによって違ってくるのではないか。認知症は「症状」であり、その原因となる病気はさまざまである。また年相応のもの忘れと認知症のもの忘れは違う。認知症には中核症状と BPSD（行動心理症状）があり、暴言・妄想などの BPSD は二次的に起きる症状で、「したいことがうまくできない」ことから起こっている。「片づけをしたいのに収納場所がわからなくなって探すため、片付けたいのに片付かない」などが一例である。DVD の事例から、特徴や関わり方を紹介したい。「金蔵さん」は 80 歳過ぎまで表具職人として丁寧さを信条に仕事をしてきたが、数年前にアルツハイマー型認知症と診断され、現在はグループホームに入居している。日常では納得できないことがあると思わず怒鳴ってしまうのでトラブルを起こすことも多い。もの忘れの症状が進み、朝と夜の時間の区別もつきにくくなってきた金蔵さん

に、スタッフは探し物をみつけやすいように声をかけ、自分でみつけたときに一緒に喜ぶという援助をしている。この「自分でみつける」こと、それを一緒に喜ぶことが大切である。職人気質で自分のことをうまく表現できない金蔵さんに対し、スタッフは「自分でできること」が何かを考え、息子さんの助けを借りて施設の障子を貼ってもらうことにした。このように、本人の得意なことをしていただくことがよいが、同時に「失敗させない」ことが重要である。スタッフの一人が弟子役になり、難しい部分は息子さんの助けを借りた。作業を進めると、仕事に厳しく妥協を許さなかった頃の表情が蘇ってきた。少しの調整がいるが、身体が覚えている記憶、人生の中で獲得してきた力を引き出すことができる。このように、生活を共にする家族やスタッフが一緒になって考えることで、「その人らしさ」を取り戻し、心が落ち着いてくる。

認知症は高齢者だけでなく、若い世代にも起きる若年性認知症がある。介護者家族の負担や収入の減少など深刻な状況があり、福祉サービスの充実が求められると同時に、社会参加やサービス利用へのコーディネートの過程で、本人･家族の心の整理の支援をしていくことが重要である。

認知症と診断された 79 歳の女性は、「相手側の会話を認知できないつらさ」「昔のことを一緒に思い出して」「話がかみ合わなくても話して」「何度同じことを言っても聞いて」「道に迷っても行けるように助けて」「必要なサービスが受けられるように助けて」と語っている。認知症の方の意見から求められている支援を考え、向き合い、寄り添う支援が必要。もの忘れへの対応、金銭管理、徘徊 SOS ネットワークなど、いろいろな支援があるが、家族だからできることや、認知症サポーターとして「習った知識を身近な人に伝える」という支援もある。一人ひとりがチェンジメーカーとして、認知症の人の気持ちを知り、自分に何ができるかを考えることが大切である。

【第 2 部】官学民協働のコミュニティケア：学生―住民―行政でつなぐリレートーク

コーディネーター　石原逸子（神戸市看護大学　教授）
相原洋子（神戸市看護大学　准教授）
コメンテーター　沖田裕子（NPO 法人認知症の人とみんなのサポート代表）

リレートークを始めるにあたり、コーディネーターの相原准教授より、以下の趣旨説明があった。健康な地域づくりはそれぞれ共通する目標だが、それぞれの立場によっては可能性や重いが異なる。本学の COC 事業は、「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティの拠点創り」を目指し取り組んでいるが、今回はマイクをバトン代わりにして話をつなぎながら、それぞれの立場から、健康な地域づくりについて語っていただきたい。

〇島谷奎汐（神戸市看護大学 2 年生　スコップ所属）

「スコップ」は、神戸市看護大学の地域防災ケアボランティアサークルで、「地域のニーズを取り上げ、face to face の関係に」を理念に活動している。これまでの学習で
は災害時のコミュニティの大切さを学んだ。災害時の地域の横のつながりは重要で、それがなければどこに誰が住んでいるのかもわからない。地域の中の学生の役割を考えたときに、地域住民と大学をつなぐという役割が大きい

と思う。皆さんは普段大学内に入ることは少ないと思うが、学園都市では災害時には大学が避難場所になる。日常から住民と大学とのつながりがなければ円滑な避難ができないので、学生が日常から「つなぐ」という役割を担っていければと考えている。

○田中優衣（神戸市看護大学３年生　ボランティア部、コーラルレイン所属）

ボランティア部は、脇の浜にあるHAT KOBEの震災復興住宅で、月１回、地域住民の血圧測定や健康相談やラジオ体操など住民との交流を行っている。コーラルレイン（コーラス）は、市内の病院でのコンサートをはじめとした活動をしている。昨今高齢化によるさまざまな問題が取り上げられるが、相互に気にかけ声をかけ合うなど、地域住民の皆さんが主体的にコミュニケーションを行うことが地域全体の活性化につながるのではないかと、HAT KOBEでの活動を通して思っている。その中で学生としてできることは、健康相談を行い健康上の不安を解消することや、体操やコーラスなどを通し住民が集まるきっかけを作ることではないかと思う。今後さらに活動を広げ、地域住民のみなさんに貢献したい。また、看護師になってからも、皆さんが退院後に帰っていく「地域」を考え理解する看護を行いたい。

○塩見萌弥（神戸市看護大学４年生　魔法のはッパー所属）

「魔法のはっパー」は、地域の複数の大学の学生が集まり、西区の大山寺児童館でさまざまなイベントを行っている。活動では、手に棒をつけて大きな絵を描いたり、新聞の山を作ったり、普段できないような大きな遊びを行う。学生によるボランティアは活動段階から入ることが多いが、ここでは「大学生が企画を行う」ことを重視し、地域の子ども達にあったもの、必要なものを考え、若い自由な発想で取り組んでいる。他に地域の餅つき大会の裏方なども行っている。活動をしていると、街中で子どもやお母さんによく声をかけられ、自分が「地域に溶け込んでいる」と感じる。「溶け込む力」は、地域のニーズを理解し、地域に入っていく上で大切だと感じている。今後、看護師としても活かしていきたいと思っている。

○高橋千栄子（神戸市須磨区民生委員児童委員協議会　竜が台地区会長

昨年、神戸市看護大学から地域連携教育のお話を頂き、私たちに何ができるのか考え、このプログラムを「地域の保健室」と名づけ、実施内容を大きな文字で詳しく記載し、住民にお知らせをした。「健康にどれくらい関心を持って下さるのか」「何人の方が来て下さるのか」とどきどきしながらお待ちしたのを今も思い出す。学生さんにとっても、地域での演習は学内演習とは大きな違いがあるようで、会場には緊張感が漂っていた。血圧の値が普段より高かった人が不安そうな声を上げると、学生さんは「計測値が間違っていたのか」と一瞬不安な表情になった。そんな中で私たちが「もう一度測ってみましょうか」と声をかけると住民も学生さんも安心されたようだった。住民の皆さんは孫のような年齢の学生さん達にとても好意的で、６～７月の暑い中、「学生さんの役に立てるなら」「学生さんを育ててあげたい」という気持ちで何度も足を運んでくださった。おかげで全10回の地域の保健室を開催できたことを私たちも感謝している。今年も「地域の保健室」を行うが、地域の皆さんの健康を見守ることができ、学生さんの学習のお手伝いができればいいなと思っている。

そして、学生さんが立派な看護師さんになることを心から願っている。

〇岡元名美（神戸市須磨区民生委員児童委員協議会　菅の台地区民生児童委員）

私は半年前に民生委員になったが､はじめの頃は地域の人の顔と名前もわからなかった。そんな中、そこから進んでいかないと民生児童委員の仕事は始まらないと思い、１つ１つ取り組んできた。COC 事業の話を受けたときも、これからの地域の福祉を考え､住民のつながりをつくる取組みに神戸市看護大学と学生さんが架け橋になってくれていると思った。これからは在宅ケアが今以上に必要になる。今日のリレートークも、「在宅での看護を必要としている人のために、
学生さん達と一緒に少しずつ輪を広げて　暮らしやすい地域をつくりたい」､「将来、地域で活動する看護師を育成してほしい」という願いで引き受けた。私は介護の仕事をしているが､「家に帰りたい」「最後まで住み慣れた家で暮らしたい」と願う人はたくさんいる。これからは､「地域でみんなが支えあって住み慣れた家で暮らせる街」にしていければと思う。民生委員をはじめ、地域住民も皆が連携して一緒にがんばっていくので、神戸市看護大学の皆さんにもこれからの力添えをお願いしたい。また、行政にもそれを伝えていきたいと思う。

〇中塩健彦（神戸市看護大学　教育ボランティア、西区在住）

40 数年前に西区に移住した。少しずつ道が整備され、街ができ、1986 年に看護大学ができた。私は何度か入退院を繰り返し、看護師に親近感を持っていたことから、他の大学ができたときとは違うある種の期待感のようなものを持った。看護大学からは教員が忙しい間を縫って地域を訪れ、健康教室など住民の健康を支える活動が始まった。今日 COC 事業の活動が紹介されたが、神戸市看護大学では何年も前からその基盤となる取組みがなされてきたものと思う。数年前からは地域連携教育が始まり、お世話になっている大学のためにお役に立てればと教育ボランティアをお受けした。何回も患者役として実習に参加するうちに学生の真剣な態度に接し、役に立っている気持ちや、教育ボランティアを続けることにささやかながら生きがいを感じるようになってきた。住民の参加は、学生にとって学生同士の演習と違い、より臨場感あふれる学習になったと思う。同時に私にとっても絶対に忘れられない、真剣な学生さんの鮮烈な思い出がある。昨今入院期間の短縮化が進み、地域での療養が主流になってきているが、学生さんが演習や実習を通して地域住民と関わることは、将来看護を行う上での自信や誇りにつながっていくのではないかと思う。

〇後藤　靖　　（神戸市須磨区北須磨支所保健福祉課　課長）

地方自治体が大学に期待することは、「地域で活動する人材の育成」「研究成果の反映」そして「情報発信」の３つである。今回の須磨区における COC 事業の場合で考えると、まずは「地域で活動する看護職の人材育成」である。2025 年に団塊の世代が 75 歳以上に達すると、認知症や介護の必要な人だけでなく、医療面でのニーズの高い人も地域で支えていかなければならない。そうすると医療・看護の知識を持った専門職の人材が地域の中にたくさん必要になる。同時に、医療機関と地域の円滑な移行において、継続看護の視点をもった人材が求められる。COC 事業では、訪問看護、継続看護を担う人材の育成、地域志向の高い看護職の育成を目指した取組みをしており、また、北須

磨地区において人材育成の取組みを進めていることに期待と感謝をしている。2 つ目の「研究成果の地域への反映」では、北須磨地区でもさまざま取組みをしていただいている。地域の課題を分析していただき、地域の活性化に反映していただきたい。情報発信では、地域を変えていくのは、「若者、よそ者、ばか者」といわれる。「ばか者」とは、既成概念にとらわれない人を指すが、若い力も同じである。既存の枠組みにとらわれない自由な発信をお願いしたい。最後に、個人的な希望として、学生さんには将来、ぜひこの須磨区で活動をしていただきたいと願っている。

〇リレートーク終了後、沖田氏から以下のコメントを頂いた。

学生さんは、そこにいるだけで地域の住民に歓迎される。若くて人生経験が少ないからこそできる「若さの特権」がある。それを最大限活かし、今だからできることをしてほしいし、時間を使ってほしい。住民が学生を育てる気持ちで受け入れてくださるのは本当にありがたいことだ。同時に、受け入れる側にとっては「人を育てる」という生きがいにもつながるのだと思う。本当の患者さんとも違うからこそ、患者さんがなかなか言えないことを助言としていただけるのだと思う。また、行政はなかなか自由な発言ができないものだと思う。しかし、実施していることがいいことだとわかるとサポートをしてもらえる。看護大学はそこをデータで示し、住民は行政によいと思うことを伝えてほしいと思う。

〇第 2 部のまとめとして、コーディネーターの石原教授から以下のコメントがあった。

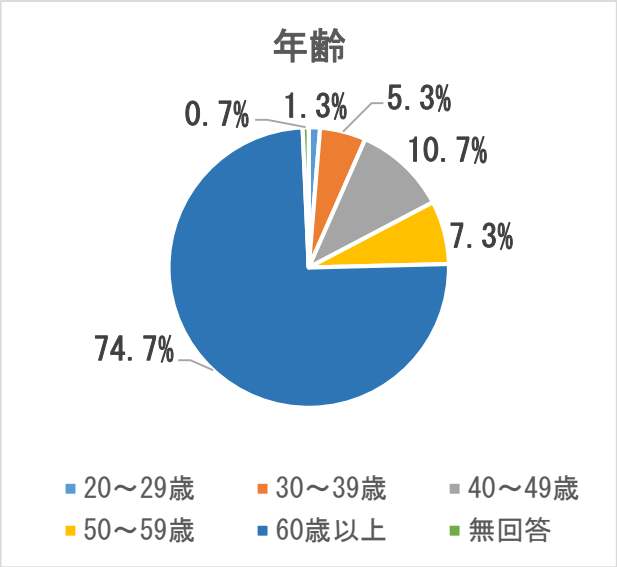
昨年の 5 月から、北須磨地区において本格的に学生が学ぶ取組みを開始した。

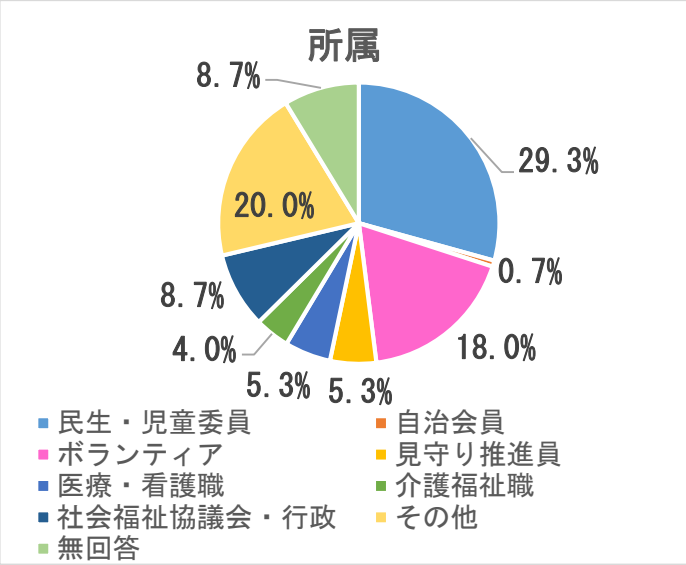
先日、COC 事業について住民にアンケートをお願いしたところ、まだまだ認知度が低く、継続的に広げていく必要性を感じている。教育ボランティアの中塩さんのお話にあったように、本学は西区での地域貢献活動は長い期間取り組んできて、今回それを基盤に文部科学省に COC 事業の申請をした。これからは西区での取り組みも大事に継続しながら、須磨区にもエリアを広げ、学生が地域の中に出向いて活動し学ぶよう取組んでいく。看護大学は、これまで看護師、助産師、保健師を輩出することで地域とつながってきたが、これからは住民の隣にいて、地域の住民の暮らしがわかる看護師を育成したいと考え、須磨区での学びを継続させていただきたいと考えている。

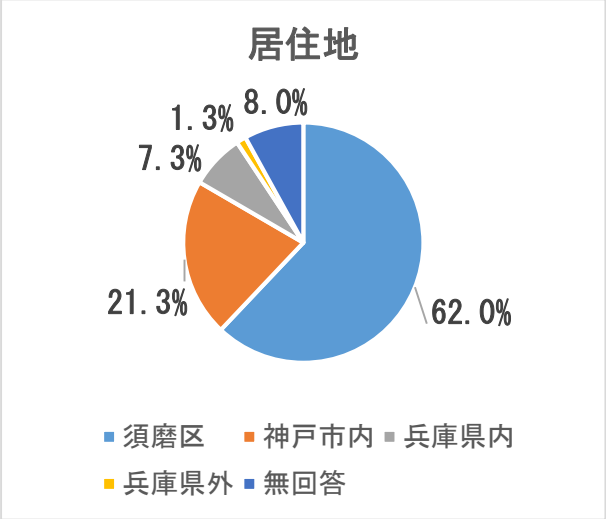
2014 年度 COC 市民公開講座アンケート結果

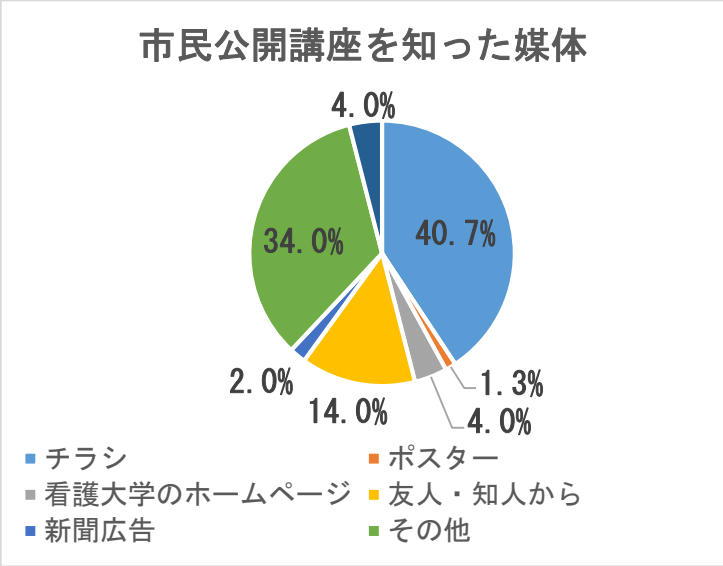
1）参加者の属性

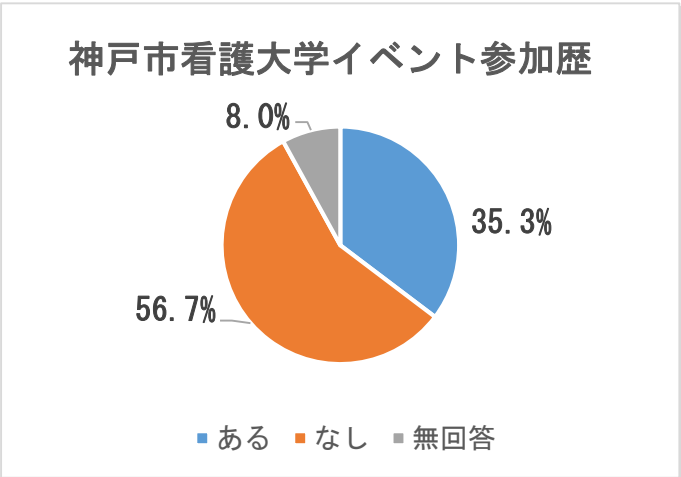
参加者：186 名、回答者：150 名（回答率 80.6%）

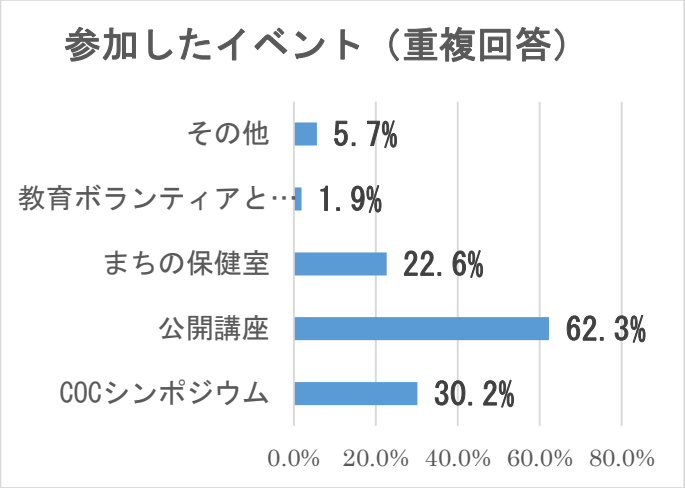




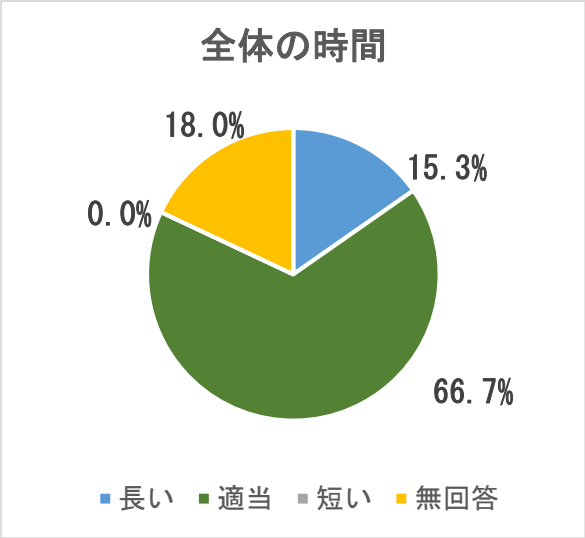


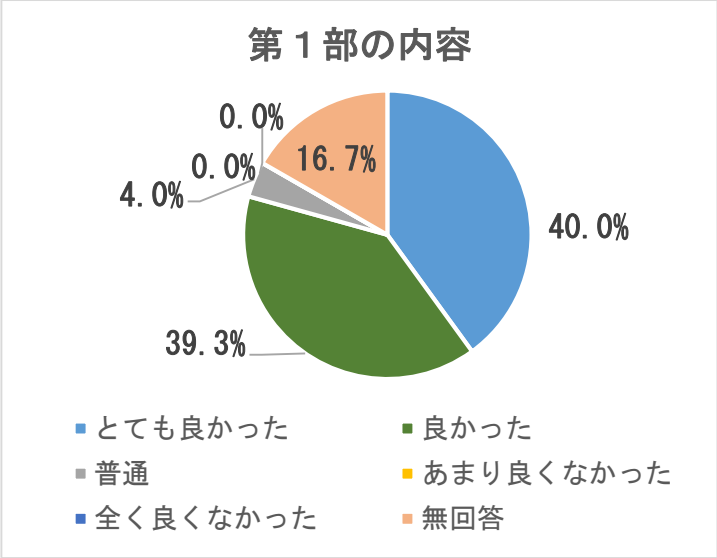


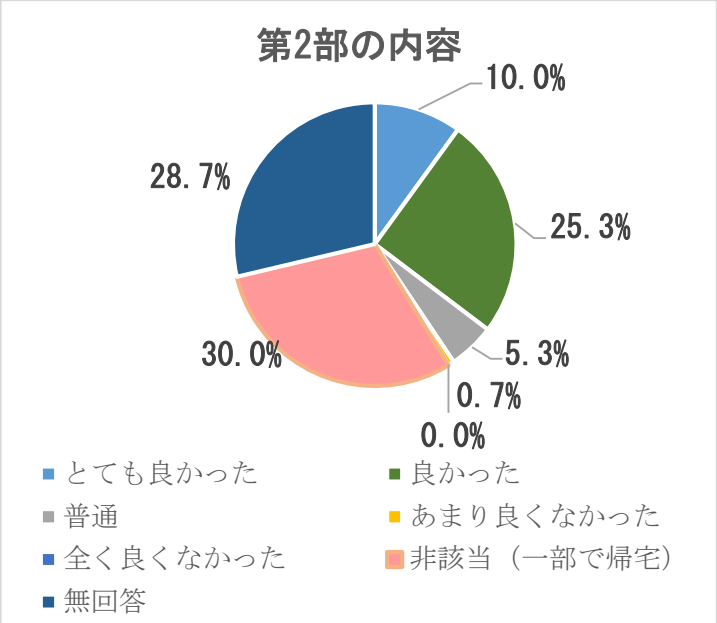




２）市民公開講座の内容について







３）自由記載

＜全体を通しての意見・感想＞

○認知の方との接し方がわからなかったのですが、少し勉強ができたと思います。将来自分もなるかもしれないと思い、相手の立場に立って接していきたいと思います。

○1 人になった人たちが生活に希望を持てる何かをみつけてあげるとよい。家に閉じこもりの人が多い。

○若い人と老人をつなげることができることを希望します。

○コミュニティが失われている。地域の清掃作業はしない、花の水やりはしない、地域の事　は参加しないと、声を出せる場所がへってきている。誰も知らん人ばかりと、家の中にいる人を喫茶や話し合いの場所を近くで作る、若い学生との交流も元気な町になる。

○地域住民をうまく（敷居を低く）取り込む共助・共生手法を提案いただきたい。

○自治会など古い組織の壁や自治会のない地域もある。もっと新しい器づくりやしてもらいたい。

○初めての参加でしたが、自分が高齢になりつつあり住民同士のつながりの大切さをつくづく感じました。楽しみを見つけることも大事だと思った。
○地域のことをもっと知らないといけないと思いました。認知症の話が少しでも勉強できてよかった。
○今回の公開講座は区役所が会場であり、区の協議会課がからんでの開催が非常によかった。定期的に市民公開講座を開催してほしい。あわせてチラシを各自治会に送付してほしい。住民に回覧されるので。大変よい講座でした。来年も実施されれば参加します。
○私自身は聴力も視力も障害者ですが、今回の講座は資料が拡大文字であったし、ループを補聴器で聞けたのでとてもよかった。ありがとうございます。
○コミュニティの話がしたかったのか、認知症の話がしたかったのか、たた統一感に欠けるように思いました。
○看護大とは、今まで医療機関勤務中には実習生のことなどで大変お世話になっていました。今回、初めて市民向けのものに参加させていただくことができ、自分自身が地域を支える側になったこともあって大変興味深く聞くことができました。また今後も機会があれば参加やお手伝いなどもさせていただければと思います。ありがとうございました。
○看護・介護について重層的に企画、出演者等は非常に勉強になりました。私ももう 70 歳近くで今まで看護者として、30 年以上かかわってきましたが、この COC 市民公開講座を学んで最後の仕事として人生を終わりたいと強く感じました。感謝。
○沖田氏の「エターナリー」の歌、本当に素敵でした。社協の存在の重要さを認識しました。学生自身がボランティア活動の中から自分の本当の視点に気付いた様子がうれしかった。
○自宅に帰れなく認知用の方に対する支援として、GPS や SOS ネットワークへの登録など個別の対応だけではやはり限界があると日頃から感じていました。地域住民の方々の協力が不可欠なことがわかってよかったです。
○認知症高齢者の方が住み慣れた地域で生活するために、みながそれぞれ役割があることを自覚できたのではないか。
○実際に地域で活動されている一緒に協力されているお話しを聞けたことが貴重で、もっとたくさんの人に伝わってほしいと思いました。
○沖田先生の話が映像を通して、説明してもらえたのでわかりやすかった。社協の話から地域の担い手育成への関わりをすすめていけたらと感じた。
○医療関係と地域の距離を改めて感じました。が、医療側が地域に目をむけてくれていることはよかったです。認知症を支える地域づくりをするには、この距離をどう縮め協働するのか、学生にしかできないことがあります。これからの活動を期待します。

＜大学の取り組みへの要望、期待＞

○地域において活動されていることをあまり知りませんでした。もっと地域住民に PR すれば、地域から大学への希望もたくさんでると思う。もっと大学・地域の交流を。
○地域に太い根をおろした大学を目指してください。ニュータウンのフリーペーパー、コミュニティ紙の発行者に協力を求めたらいかがでしょうか。
○学生との交流の場を設けてほしい。